

声楽家への軌跡-『師』との創造体験 I

豊田 喜代美

声楽家への軌跡は、全て、人との出会い、その人の全人格から学ぶことによって作られていった
と思っている。思い出せば思い出すほどに感謝の気持ちが溢れてくる。

私は23才の時に東京二期会オペラ公演でデビューし、26才でドイツのケルン音楽・演劇大学
大学院に留学し、33才で『サントリー音楽賞』受賞の栄誉を頂き、オペラ公演やオーケストラ定
期演奏会ソリストとして活躍の機会を多く与えられ、いくつかのオーケストラ演奏は、後世に残す
記念演奏としてCD,DVDに収められており、NHK・FM番組『レジェンド』で取り上げられて
放送されるという身に余る幸せな軌跡を歩ませて頂いてきたと思っている。

オランダ交響楽団定期演奏会「モーツァルト/モテット」全3回演奏で全聴衆のスタンディング
オーベーションを受けた体験からは、『違い』を問題としない音楽の力を学んだ。社会的に声楽家
と認められるようになってから35年以上になり…育てて下さった出会いの体験を記すことで感謝
を表すことができ、その成果を皆様と分かち合うことができたなら幸いに思う。

この軌跡の初穂は、生まれたての時から母親の歌う子守歌だと思っている。優しくて情感豊か
な母の歌を私はいつも待っていたように思う。そして母との斉唱と二重唱、家族全員で歌う体験で
歌が大好きだったことが声楽家への軌跡の入り口である。

5才でピアノを習ったがピアノが無かったので紙ピアノで母と勉強し、ピアノの在る近所のご家
庭で練習させて頂いた。感謝している。家にピアノが到着した時のことは今でも覚えている。5才
からはピアノ演奏学習に集中し、18才から萩谷納、柴田睦陸、柴田喜代子各師の許で声楽基礎訓
練を開始した。(このかけがいのない体験は前号の「私の受けた声楽の指導」で記させて頂いた)

大学卒業時に大学代表として読売新聞主催の新人演奏会に出演し初めて東京文化会館大ホールで歌った時の体験は今も鮮明に覚えている。独特のホールの匂い、その響きの心地よさに大きな安心感を覚えた。

演奏曲はドニゼッティ作曲《Linda di Chamounix/シャモニーのリンダ》からアリア〈O luce di quest' anima/私の心の光〉とプーランク作曲の歌曲〈C/セ〉であった。ピアニストは同学年の星野明子さんで、彼女はドイツ・シュトゥットガルト音大歌曲伴奏科に留学し研鑽を積み、助手として指導と演奏を行い、帰国後は国立音大の歌曲伴奏教授として、後進の指導にもあたった。

大学生時の星野さんとの出会いでドイツ音大歌曲伴奏科の存在を知り、その後の歌曲演奏に対する正しい姿勢を持つことができたと思っている。

私は大学卒業年にそのまま二期会研究生になり、演技、モダンダンス、日本舞踊などの舞台実習研修を受けた。研究生時、二期会公演「タンホイザー」お小姓役で舞台プロデビューしてから今年で45年になる。研究生時には他にフィガロの結婚の花娘、魔笛の童子を歌い、大学での学びの余韻が残っている20才代前半にプロフェッショナルなオペラ舞台経験を積めたことを幸いに思う。素直に体験が身についていく実感があった。

26才でドビュッシー作曲「ペレアスとメリザンド/東京オペラプロデュース公演」で初めての主役を歌った時の指揮は若杉弘氏、演出は佐藤信氏だった。日本語翻訳は非常に厳しく精査され、稽古中に歌いながら違和感のある部分を即修正するなど、翻訳者・出演者・指揮者・演出家の全員で徹底的に努めた結果、「フランス語のニュアンスが生きた日本語訳」との複数の新聞講評を頂き、努力は報われると思う体験になった。メリザンドとペレアスは新人が歌い、舞台写真と共に掲載された高評の新聞記事は母のおかげで今も保存されている。この写真を見るとその時の研修体験が蘇り、気が引き締まる思いがする。

メリザンドは、それまでのモーツァルトの役柄に無いミステリアスな役で、新進気鋭の演出家・佐藤信氏はリハーサル中、険しい表情を崩さずに、容赦のない厳しい指導で鍛えて下さった。当時はただただ指導に応えるのに夢中で、自分の身内から湧き上がってくるような動きの感覚はなく、佐藤氏の演出についていくのに必死であった。指揮の若杉弘氏はコレペティとしても楽譜の正確さを徹底して指導なさり、メリザンドを演ずる私が演出家からの指示に応えようとするのを、深く見守っておられるのを感じていた。そんな幸せな（苦しく）オペラ歌手として初めての主演の機会であったが、公演中出ずっぱりのメリザンドに体力を使い果たし、後半になって舞台袖に引っ込んでの待機中には舞台袖のソファで横になっていた。最後までメリザンドをしっかりとやりきることができたことを神に感謝した。この体験はプロのオペラ歌手としての階段を一段登らせてくれたと思っている。

メリザンドの2か月後にドイツに留学し、ケルン音楽・演劇大学マスタークラスで E.Bosenius 教授の許で、研修を行なった。「プロフェッショナルになる能力は、一からマキシマムまで『素直』な性格です」と教えて下さった。

入学した年の秋にケルン歌劇場協力の衣装とメイクによる大学主催の本格的オペラ抜粋公演がケルン音大のザールで催され、主要な相手役は既に歌劇場専属の歌手が助演し、私はホフマン物語のアントニアを歌い演じた。

4月に入学して3か月後の7、8月の夏休みには、このオペラ研修がミュンヘンのゲルノート氏（演出家）のスタジオで合宿形式で行われた。

ホフマン役は当時既に歌劇場でホフマン役を歌っている歌手で素晴らしい演技と歌唱で支えてくれた。ケルン音大とボゼニウス先生、演出のゲルノート先生故に与えられた貴重な体験であった。

大学主催公演にはドイツ国内の Agentur（マネジメント）が来ており、即契約交渉になる学生も

いた。私はデュッセルドルフのパーシュからお話を頂き、歌劇場の Vorsingen（オーディション）を待っていた。11月にはモーツァルト・レクイエムのソロの機会を頂いた。

同じ頃に、東京二期会からのフィガロの結婚/ケルビーノ、東京オペラプロデュースからのセヴィラの理髪師/ロジーナのオファーがあった。帰国か在独か…人生の中でこんなに悩んだ事は無いと思えるほど、精神状態が危なくなるほど悩んだ。幻聴まで聞こえるようになり、これは良くないと思い、住んでいたカトリック教会女子寮の星出さんの部屋に行き、一緒に過ごした。彼女は日本から送られてきた梅酒を温めてふるまってくれ、私は自分の部屋に戻った後、数か月ぶりに良く眠れた。そして目覚めた朝には「帰国しよう！」と心が決まっていたので、日本に連絡した。この友人の存在は天の恵みだったと感謝している。

その時、同時期に留学していた指揮者志望（後にプロの指揮者）のK君から「マネジメントが決まっている状況の中で帰国するのか？いくじなし！」と言われた。その時は、そのように考える人もいるのかと思ったが、5年後にサントリー音楽賞を受賞して、記念演奏会準備のトレーニングのために渡独した時には「喜代美さんの帰国は正しかったと思う」と言われた。

帰国して最初のオペラ公演は、《セヴィラの理髪師/ロジーナ/東京オペラプロデュース》と《フィガロの結婚/ケルビーノ/東京二期会》で、フィガロの結婚の演出家は鈴木敬介氏であった。研究生時の最初のタンホイザーのお小姓、魔笛の童子、フィガロの結婚の花娘の演出全てをなさっておられた。ケルビーノをはじめ、その後の魔笛/パミーナ、魔弾の射手/アガーテ、セヴィリアの理髪師/ロジーナ、イドメネオ/イリア、コジ・ファン・トゥッテ/デスピーナ、フィオルディリージ、夕鶴/つう他の演出の際に、それは厳しく妥協無く指導を受け、公演を重ねる度に自分の成長と反省を繰り返し感じてきた。二期会オペラの多くを演出なさっていた鈴木敬介氏はドイツで長く研鑽を積み、こけら落としにベルリン・ドイツ・オペラを招聘した東京日生劇場に深く関わっていらっし

やった。鈴木敬介氏は、ただ形だけになっている演技を全て見抜かれるので、リハーサルは一瞬たりとも気が抜けない必死の時間であった。演出中に鈴木敬介先生が頭を掻きむしる様子を何度見たかしのれない。その度に心臓が破裂しそうになったが、OKが出るまで、思い切って！の演技に挑戦し続けた。

リハーサルの帰路、小田急線で帰宅途中、下北沢駅の電車内で気絶し降車して駅長室で家族の迎えを待ったことが一度ならず経堂駅でもあった。私はオペラ稽古時の辛さと苦しみを誰にも、母にも言うことは決してなかったが、毎食事の席を早く退出するなど必死に自主トレをしている私を見て、母には状態は解っていたのだろう。

特に声をかけることは無く、その期間は隠れてお茶を絶つなど…祈りつつ共に居てくれたことを、当時の私は全く気づかなかった。護られているとは知らず安心して、のびのびと思うままに演奏に没入していた。

毎本番時に楽屋で頂く母手作りのおにぎりはリボンで可愛く閉じられていた。

その母に真正面から「ありがとう」と感謝を言ったのは、昨年3月に帰天する直前だったことを心から悔やんでいる。桐朋音大生時、蝶々夫人の着付けをしてくれた母を見て、演出の先生はつくづく「いーいお母さんだね～」とおっしゃったのを折に触れて思い出している。

演出家から徹底的に厳しく鍛えられ、その度に、思い切って！の演技に挑戦してOKをもらう自己超越体験、指揮者との徹底した楽譜を通しての音楽共有の体験は、『サントリー音楽賞』受賞という成果に繋がった。

授賞理由は以下のとおりである。『豊田さんの受賞は、オペラ、オラトリオ、コンサートなどにおいて今日の声楽家としての新鮮な感覚をもった存在を示した、その目覚ましい活躍によるものです。特に贈賞理由としては、①昨年9月1、2日の日生劇場におけるオペラ<コシ・ファン・トゥ

ッテ> (モーツァルト) でのデスピーナ役、②同9月25日に上演されたオペラ<ホフマン物語> (オッフェンバック) で、日本人としてはじめてオリンピア、アントニア、ジュリエッタとステララの4役を受け持ち見事に演じ分けたこと、③第114回「毎日ゾリステン」(同11月28日) として行なった初のリサイタル、同11月9日の「プロムジカ合唱団」定期の小泉和裕指揮による<天地創造> (ハイドン) などでの知的で端正な歌唱表現があげられています。(サントリー音楽賞ホームページより) 』

上記デスピーナは、思い切って! ちょい悪女の演技に挑戦し続けた。公演ではポイントの所作ごとに聴衆がワーッと湧いて受けるので驚いた。演出家の面目躍如と思う。

ホフマン物語の音楽には4役(女優、人形、肺病で歌手志望の娘、娼婦)の表現が在るが演技は歌手に任されている。それまでの出会いによる学習体験の蓄積があつてこそ演ずることができたことは間違いない。

授賞決定を聞いた瞬間に声楽の恩師、演出、指揮、共演者、舞台スタッフ、企画のお一人おひとりの顔が走馬灯のように浮かび、一緒に頂いた賞なのだという実感と感謝で胸が爆発しそうになったのを覚えている。33才の春だった。

授賞式でサントリー会長・佐治敬三氏から頂いた「21世紀において音楽の多様な可能性を切り開くであろうことを期待している。」とお言葉は通奏低音のように心に鳴り続けている。

『師』と出会わせくださり、成長の体験をお与えくださる、大いなる導きに感謝している。

マエストロ小澤征爾との出会いは30才時のコンサートで、ベートヴェン《ミサ・ソレムニス/新日本フィルハーモニー/東京カテドラルカトリック教会》である。

この小澤先生との最初の演奏体験で、音楽家としての精神的基盤が叩きこまれた。次号に記させて頂きたい。

オペラでの共演はシェーンベルク作曲モノオペラ《期待》、ベルク作曲《ヴォツェック/マリー》、
オッフェンバッハ作曲《ホフマン物語/4役》、ヴェルディ作曲《ファルスタッフ/ナンネッタ》他
である。

ナンネッタの恋人役フェントンは高丈二氏であった。高氏はスターテノールとして輝いておられ、
共演は楽しみで光栄に思っていた。ナンネッタを歌う時には、既に高丈二氏とはロジーナと伯爵で
共演させて頂いていた。同じ舞台を踏ませて頂いて学んだことは、品格在ることの尊さだった。持
って生まれた資質というものの上にオペラ歌手としての技量が舞台上に花開く素晴らしさを共演
して知った。本会の沖縄県立芸大関係の役員のほとんどは高丈二先生の指導を、直接、間接に受け
ている。時期が来たら那覇の研究会での公開レッスンを、一同希望している。

声楽家の軌跡は、近年、教育家としての道にしっかりとつながった。沖縄県立芸術大学赴任体験
は、私の大学院時代からの研究テーマである『芸術創造研究』が人材教育と合体し、多くの気づき
と成果を与えてくれた。

現在は東京大学教養学部『芸術創造連携研究機構』の1つの授業、身体運動科学者・工藤和俊先
生との『楽器としての身体：声楽の実践と科学』につながっている。

授業で学生さんに接し、総合大学における芸術創造体験の場の存在意義を深く感じている。『芸
術創造体験』とは何か？それは一言で言えば『自己超越体験』であると考えている。

芸術と教育を結ぶことによる人材教育の成果は既に世界的に注目され、今後、益々研究が盛んにな
ると思うにつれ、『美感遊創』を謳う佐治敬三氏の「音楽の多様な可能性」について、思い巡ら
せている。



第16回サントリー音楽賞授賞式（東京會館）1984年4月

左から佐治敬三氏 筆者 筆者の母・豊田喜久子

加筆：本ホームページ記載のケルン音大主催オペラ抜粋公演 ホフマン物語アントニア役 舞台スナップ写真

